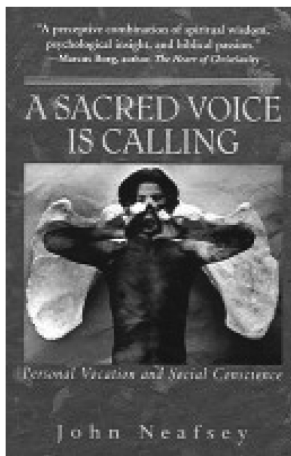


《書 評》

John Neafsey (2006). *A Sacred Voice is Calling-Personal Vocation and Social Conscience*

— キャリア教育と精神性・宗教性 —

才 藤 千 津 子



「キャリア」という言葉は、一般に、「職業」や「働くこと」を中心とした諸経験の連鎖と累積を通して個人に形成される経歴だと考えられてきた。しかし広義には、職業的キャリアのみならず、仕事や働くことを中心にした「ライフ・キャリア」や「人の生き方全体」について考えるのがキャリア教育の目標だとされることもある。2011年、文科省は大学設置基準を変更し「社会的・職業的自立に向けて知識、技能、態度をはぐくむ教育」としての大学でのキャリア教育を義務化した。以後文科省の要請に基づき、全国の各大学・短大では、キャリア教育へのさまざまな取り組みが行われている。しかし、ともすれば大学でのキャリア教育が「就職支援活動」に重きを置きがちの中で、本学のようなキリスト教主義大学においては、勤労観や職業観といった価値観のもつ重要性に注目し、また「働くこと」が人生においてどのような精神的、

宗教的、意味を持つのかという視点を持って教育を行うことが肝要だと考える。

ところで、そもそもキリスト教は、仕事や働くことをどのように考えているのだろうか。キリスト教で言う「天職」や「召命」とはどういうものだろうか。またそのことを、今日の若者に伝わる言葉で説明するにはどうしたらよいのだろうか。ジョン・ニフシー(John Neafsey)『聖なる声が呼んでいる—個人の天職と社会的良心(A Sacred Voice is Calling-Personal Vocation and Social Conscience)』は、そのような疑問に答えようとする本のひとつである。著者ジョン・ニフシーは臨床心理士であり、アメリカ、イリノイ州シカゴに本部をもつカトリック系のロヨラ大学神学部の教員でもある。この本においてニフシーは、人が聖なる呼び声に従って生きる、「vocation(天職・召命・使命)」に従って生きるというのはどういうことかを論じようとした。古今東西の古典からさまざまな人の例を引用しながら、心理学や神学などに基づいた学際的でエキュメニカルな立場から、職業や労働の精神的、宗教的な意義を描き出そうとしたのである。

英語の「vocation(天職・召命・使命)」という言葉は、もともとラテン語の動詞「vocare」(呼ぶ)という言葉から来ていると言われる。では、人は誰から「呼ばれる」のだろうか？

中世までの西欧世界においては、それは「神」であり、人が宗教的使命に「呼ばれる」ときに「vocation」という言葉が使われた。聖職者に

任じられる人々は神から「呼ばれた」人々であり、彼らは「vocation」へと招かれた人々であった。しかし、時代とともに「vocation」の概念は変化を遂げた。特に、16世紀ドイツに始まるプロテスタント宗教改革の中心的人物ルターによって、それまでの「vocation」の理解が大きく広がり、その言葉は世俗の職業にも当てはまると考えられるようになった。パン屋も靴屋も等しく、仕事を通して神の召命に応えていると考えられたのである。現在「vocation」という言葉は広く「職業」という意味も持つが、その際でも特定の職業や生き方に神から導かれた「使命感」や使命を持って従事する「天職」といった宗教的含みを持った言葉として使われる。

ニフシーのこの著書は、アメリカのリリー財団による「vocationの神学的研究に関するリリー基金プログラム (the Lilly Endowment's Programs for the Theological Exploration of Vocation) から助成を受けて行われた研究の一部である。リリー財団は、近年「現代の若者の職業選択と宗教」についてのさまざまな研究や活動に、多額の助成を行ってきた。かつてのアメリカでは、信仰をもった若者の多くが、司祭や修道士、牧師など宗教者としての生き方を選択した。しかし現代の若者たちのほとんどは、たとえ信仰を持っていたとしても、もはや司祭や牧師への道を選ぶことはない。彼らは大学を卒業するにあたって、それぞれ自分を導く「内なる声」に従って一般の職業を選んでゆくのである。実際、筆者が数年前1年間滞在したアメリカ西海岸のプロテスタント神学大学院でも、学生のマジョリティは、セカンドキャリアとして牧師への道を選んだ30代や40代の男女であり、20代の若者ではなかった。かつて宗教的な使命、聖職へと導かれた若者たちは、今日ではその代わりにどのような生き方を選び、どのように生きていったらよいのだろうか。

青年期において、人は、将来の職業選択や生

き方についての選択を迫られる。現在、アメリカのキリスト教主義の大学では、宗教的観点から「vocation」やキャリアの問題を考える機会を学生に提供しようとする動きが強まっている (Cunningham, 2009, p. 13)。そのような状況を反映してか、アメリカにおける近年の「vocation」研究動向の特徴の一つは、10代後半から20代前半の大学生世代の職業選択に関する研究が多いことである (同上, p. 5)。前述のリリー財団の助成プログラムの中でも、多くの研究者によって青年期の若者、特に大学生向けのテキストが書かれている。それらに共通している傾向は、「vocation」についてのキリスト教の伝統的な考え方から脱して、現代社会を生きる若者に訴える新しい「vocation」の意味を探ろうとしていることである。

この本において著者ニフシーは、スピリチュアリティ (精神性・宗教性) と心理学という2つの観点から「vocation」について考察する。この本のアプローチのユニークな点は、9.11米同時多発テロやイラク戦争、南アフリカでの人種差別など、さまざまな現代の社会問題を例に挙げながら、職業選択に際しての個人の「良心」の問題と、人が生きる意味の問題を論じていることである。ニフシーは、「vocation」は「他者への奉仕」という観点から考察されなければならないし、また、「vocation」形成にあたっては社会正義の問題に対して批判的的目を持つ「良心」を育むことが重要だと述べる。ニフシーによれば、「良心」は私たちの魂に語りかける神のささやきであり、私たちが他者に奉仕し世界市民として責任ある行動をとるよう促す声である。

ニフシーは、ウィリアム・S・コフィンの「キャリアは成功すること (be successful) を求めるが、vocationは価値あること (be valuable) を求める。キャリアは金を生み出そうとし、vocationは価値ある変化を生み出す」という言

業を引用して、そのことを説明する。彼は、私たちに与えられた本当の「vocation(天職・職業・召命)」を見出してゆくための人生の旅路を、アメリカ先住民スー族の長老ブラック・エルクからカトリックの修道女マザー・テレサ、そして文学者ソローにいたるまで、人類全体の益になるような生き方を求めて生きたさまざまな人々の言葉を引用しながら論じる。

しかしそもそも、人が自分の「vocation」を見出し神の(あるいは内なる)呼び声に従って生きるというのは、どういうことなのだろうか。これが自分にとって本当に正しい「vocation」だと、どうすれば的確に判断できるのだろうか、またその判断基準は何なのだろうか。ニフシーは、心理学的観点から見れば、「vocation」の発見は、私たちの心の奥底の「真の自己(true self)」に由来すると考える。心理学者ユングは、このことを「心全体の中心」、「セルフ(自己)」と呼んだ。またガンディーは、「私にとって、神の声、良心の声、真実の声、心の内の声、そして『静かで小さな声』はすべて同じものを指す。」と述べた。「真の自己」に出会うためには、自分の心の奥深くを見つめ、人々との出会い(ニフシーによれば、特に「貧しい人々」との出会い)の中で起こってくる様々な出来事の意味を考え、先達の生き方や古典から学ぶ必要がある。人生を振り返ってみると、何か新しいことに挑戦したとき、たとえ多少のリスクがあったとしても、直感的に「自分は正しい方向に踏み出している」と思えたときがあるに違いない。ニフシーにとってこのようなときこそが「真の自己」との邂逅のときであり、その出会いに基づいた「vocation」を生きることは、私たちひとりひとりが意味ある人生を生きるための基礎なのである。

キリスト教、特にプロテスタント・キリスト教の職業観について、ルターやカルバンをはじめとした伝統的なキリスト教思想を紹介した書

物はすでに日本語でも何冊も出版されている。しかし、この本のように、キリスト教のスピリチュアリティ研究の立場から、現代社会を生きる人々に語りかける実践的な視点をもって「vocation」について書かれた本は、日本ではほとんど見当たらない。ニフシーは、「vocation」の問題はまさに「心(heart)」の問題だという。今日、キャリア教育においてもっとも必要とされていることのひとつは、ニフシーが言うような意味での「心(heart)の教育」ではないだろうか。

引用文献

David S. Cunningham (2009), "A Plentiful Harvest: The Fruits of Lilly-Sponsored Programs on Vocations", *the Website Resources for American Christianity*, pp.1-30. Retrieved on Oct. 1, 2014 from <http://www.resourcingchristianity.org>